

大学生のアパシーに関する一考察

— 愛着スタイルと自尊感情に着目して —

○ 森 俊樹

(愛媛大学大学院教育学研究科)

目的

大学生の社会問題として、スチューデント・アパシー (Student Apathy) が挙げられる。その中で高石 (2009) は、大学相談の中で近年、「時間をかけ、主体的に悩めない」学生の増加を指摘している。従って現代大学生の特徴として「悩めない」ことが挙げられるとし、本研究では下山の (1997) 「悩めない」心理障害の定義を採用する。アパシーの家族因に着目した毛利・相模 (2008) は、不健全な愛着形成が影響することで人格障害的なアパシーを生じさせると考察した。従って愛着スタイルとの関連が予測される。また、竹中 (2012) 不登校の学生と関わる中で「対人関係の未熟さや自尊感情の低さ」を報告しており、不登校に至る経緯として自尊感情の低下が予測される。従って本研究では、「悩めない」学生であるスチューデント・アパシーの要因を明らかにするために、愛着スタイル及び自尊感情との関連を性差での比較も含めて検討することを目的とする。

方法

(1) 仮説：①見捨てられ不安が高い者は、自尊感情が低く、アパシー傾向が高い。②愛着スタイルの恐れ型は、その他の型よりも大学意欲が低下している。

(2) 質問紙：①一般他者を想定した愛着スタイル尺度 (ECR-GO) (中尾・加藤, 2004) ②Rosenbergによる自尊感情尺度 (内田・上埜, 2010) ③アパシー心理性格尺度 (下山, 1997) ④意欲低下領域尺度 (下山, 1997) (3) 協力者： A県内B大学の大学1、2年生287名。年齢は18～21歳 (平均年齢は18.78歳)、有効回答数は241 (男性93名、女性148名、有効回答率は83.97%) 名。

結果

毛利 (2008) に倣い、各尺度は男女別に、最尤法・プロマックス回転を指定した探索的因子分析を行った後、確認的因子分析を施した。

仮説1を検証するために、共分散構造分析を実施した。

①男子学生におけるアパシー傾向への影響関係

共分散構造分析の結果、RMSEAと X^2 値のp値において、よい適合度を示さなかった。 $(X^2$ 値=65.36,p

=.000,GFI=.867,AGFI=.770,RMSEA=.128,AIC=103.36)

②女子学生におけるアパシー傾向への影響関係

共分散構造分析の結果、 X^2 値のp値においてよい適合度を示さなかった。 $(X^2$ 値=139.71,p=.000,

GFI=.881,AGFI=.831,RMSEA=.069,AIC=193.71)従って、仮説1は男女とも支持されなかったと考えられる。

仮説2を検証するために、愛着スタイルの「見捨てられ不安」「親密性の回避」の2因子をそれぞれ平均点からクロスさせて分類した「安定型」「拒絶型」「とらわれ型」「恐れ型」を独立変数、意欲低下領域尺度の下位尺度「大学意欲低下」を従属変数とし、一要因の分散分析を行った。結果として男子学生では愛着スタイルの有意な主効果が認められなかった。 $(F(3,89)=0.674, n.s)$ 女子学生では、1%水準で有意な愛着スタイルの主効果が見られた $(F(3,144)=20.03, p<.001)$ 。その後TukeyのHSD法による多重比較の結果、恐れ型とその他の3種類の型の間にいずれも0.1%水準で有意差が認められ、恐れ型>安定型、拒絶型、とらわれ型であった。

考察

仮説1の結果として、男女共にモデル検証を行ったが、適合度の低さを示したため、アパシー傾向の要因として愛着スタイル尺度の下位尺度の見捨てられ不安と自尊感情を想定した因果関係は支持されなかった。従って、大学生が病的なアパシーになる要因を検討する上で、毛利・相模 (2008) の考察と合わせて考えるとより不健全な愛着形成に絞った尺度選定を行う必要性が考えられる。

仮説2の結果では、女子学生において、大学意欲の低下は愛着スタイルによって差があることが示唆された。従って、女子学生は男子学生よりも対人関係における信念や信頼感の影響が強いことが推測される。更に意欲低下領域尺度は一般学生の無気力を測定する尺度 (下山, 1997) のため、一般学生の無気力には愛着の不安定さが影響していることが示唆されたと考えられる。